太陽信仰と蛇信仰に関する日中比較研究

――稲作文化の伝来を中心に――

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号:D183740

氏 名: 程海蕓

本論文は「八咫鏡」「草薙剣」「八坂瓊の曲玉」に含まれた太陽信仰と蛇信仰を視点として、稲作文化の伝来について考察したものであり、本論五章及び序章と終章から構成される。

序章では、先行研究、研究内容、研究方法について述べる。

第一章「稲作漁撈民にとっての太陽信仰と蛇信仰」では、稲作文化と太陽信仰、蛇信仰の繋がりについて考察する。日本においても、中国においても、太陽信仰と蛇信仰の一体性が見られ、「鏡」「剣」「勾玉」の出現およびその展開は稲作文化の伝播と密接にかかわっている。7000 年前に長江下流域で生まれた稲作が紀元前 10 世紀後半に日本の九州北部に伝わってきた。「銅剣」「銅鏡」「勾玉」はいずれも稲作文化の伝播過程において確立され、太陽信仰と蛇信仰の一体性を表している。

第二章「八咫鏡から見る太陽信仰と蛇信仰の一体性」では、「八咫鏡」に焦点をしぼって太陽信仰と蛇信仰の一体性について考察する。主に、『古事記』『日本書紀』に出現した鏡の記載に基づき、その文化的意味を探究する。そして、八咫鏡の民俗的な意味、内行花文鏡と三角縁神獣鏡の関係、八咫鏡と中国ミャオ族の鏡についても考察する。八咫鏡は最初、天照大神のご神体として出現し、天照大神の御霊がその中に潜んでいるが、同時にまた蛇神でもあるから、八咫鏡には太陽信仰と蛇信仰が含まれていることがわかる。八咫鏡の形を模して作った鏡餅にも太陽信仰と蛇信仰が含まれているのである。『日本書紀』から推測すれば、「八咫鏡」の文様は内行花文である可能性が高いが、事実、内行花文はミャオ族にも見られる。ミャオ族は春秋戦国時代には楚国に属し、その一部は淮河流域に住んでいた。淮河流域の銅陵は銅の産地であり、「尚方鏡」が数多く出土した。「銅」は『ミャオ族古歌』にも歌われており、しかも「鏡」を指すミャオ語と和語には、ともに「太陽」と「蛇」の意味が含まれている。稲作の伝播と結びつけて考えると、「八咫鏡」に含まれた太陽信仰と蛇信仰はミャオ族と深くかかわっているのである。

第三章「草薙剣から見る太陽信仰と蛇信仰の一体性」では、『古事記』と『日本書紀』に出現した草薙剣の記載に基づき、その文化的な意味を述べながら、「草薙剣」の伝来ルート、およびそれが表している太陽信仰と蛇信仰について考察する。「草薙剣」は素戔嗚尊が退治した八岐大蛇の尾から取られたもので、蛇の象徴である。出雲国肥河に近い荒神谷遺跡から 358 本の銅剣が発見されており、閩越地域でも数多くの銅剣が発見され、しかも銅剣から蛇信仰もみられる。春秋時代に入ると、戦争によって大量の亡命者が現れ、彼らが愛用してい

た剣も日本に伝わってきた。日本列島周辺の黒潮を利用すれば、長江下流域から周山諸島を経由し、さらに対馬海流に乗って、日本海側の出雲地域や北陸地域に上陸することができる。こうした交流の歴史を踏まえてみれば、大蛇信仰と銅剣の一体性は中国の長江下流域と関わっていることがわかる。弥生初期に大陸から伝来してきた銅剣は武器であったが、巨大化した後期の銅剣は祭器であった。銅は金色で太陽光を反射するという点から考えれば、太陽信仰が当然その中に含まれているが、大蛇の尾から取ったという描写と結び付けてみると、蛇信仰も同時にその中に含まれているのである。

第四章「八坂瓊の曲玉から見る太陽信仰と蛇信仰の一体性」では、「八坂瓊の曲玉」を中心に考察する。『古事記』や『日本書紀』では玉に関して多くのことが書かれている。まず『古事記』と『日本書紀』に出現した玉の記載に基づき、その文化的な意味を述べる。そして、定形勾玉の意味、勾玉に関する交流も述べる。「タマ」は古書では「霊」・「魂」・「玉」などと記され、もともと神聖な意味を有している。八坂瓊の曲玉は御頸珠として、伊耶那伎命が天照大神に与えたものであり（『新編日本古典文学全集 1　古事記』p. 53）、最初から太陽神天照大神と関わっているのである。蛇神大国主神の御霊代は「八坂瓊の曲玉」である。大物主神が住んでいた三輪山の山頂で、日の神を祀る太陽祭祀が行われた時代があった。「八坂瓊の曲玉」にも蛇信仰と太陽信仰が含まれているのである。

縄文後期以後、勾玉の多くは翡翠で作られ、新潟県糸魚川市周辺から全国へと広がっていった。北九州で作られた翡翠製定形勾玉は糸魚川産の翡翠を利用していた。『出雲国風土記』や『古事記』などの古典に出てきた越人が出雲地域へ移住したこと、大国主神が高志へ行って奴奈川姫に求婚したことなども、古代における北九州地方と北陸地方との交流を物語っている。「八坂瓊の曲玉」は定形勾玉であり、その出現は稲作の伝来と連動している。定形勾玉は卑弥呼の時代にもっとも珍重されており、その姿は蛇と鳥の結合である。その形には稲作漁撈民の魂が潜んでいると考えられる。

第五章「鏡、剣、玉の統合」では、「八咫鏡」「草薙剣」「八坂瓊の曲玉」の統合について考察する。主に、神璽としての鏡・剣、権威象徴としての鏡・剣・玉、求婚礼器としての鏡・剣・玉、祭祀器具としての鏡・剣・玉を中心に分析する。『古事記』には「鏡」という字が 15 回、「剣」という字が 22 回、さらに、「玉」という字が 63 回出現している。『日本書紀』には「鏡」が 45 回、「剣」が 108 回、「玉」が 149 回出現している。「鏡」「剣」「玉」が日本の歴史を貫く

物であると言っても過言ではない。『日本書紀』の記録によると、最初、天皇が即位した時に使った神璽は「鏡」と「剣」であり、勾玉には触れていなかった。『日本書紀』の中には「剣」と「鏡」が共に出現した例は 4 回ある。神功皇后が「剣」・「鏡」を捧げて、神祇に祈って溝を通した記録から見れば、「剣」・「鏡」には呪力がある。また天皇即位の時に、天皇に奉上されたことから見れば、権威もあるということがわかる。

「剣」・「鏡」・「玉」の組み合わせは権力の象徴であった。福岡市の吉武高木遺跡は有力者の墓とみなされ、そこから「剣」・「鏡」・「玉」の組み合わせが出土した。須玖岡本遺跡や三雲南小路遺跡にも青銅製の剣、鏡、大量の玉が副葬されていた。

伊勢神宮と出雲大社のつながりについても考察する。「八咫鏡」が伊勢神宮で祀られ、「草薙剣」が出雲で発見されたので、伊勢神宮と出雲大社は三種の神器と深くかかわっている。個別的にみれば、伊勢では太陽信仰を中心とし、出雲では龍蛇信仰を中心としていたが、しかし稲作漁撈民にとって、太陽信仰と蛇信仰はともに不可欠な信仰である。

「三種の神器」が天照大神から瓊瓊杵尊に授けられた背景としては、紀元前 224 年から紀元前 222 年まで、秦の始皇帝が中国を統一するために、楚国と越国を滅ぼしたという歴史的事実があげられる。「剣」・「鏡」・「玉」に関する中国大陸との文化交流も確実に存在していたので、「八咫鏡」「草薙剣」「八坂瓊の曲玉」に含まれた太陽信仰と蛇信仰は外来性を持っているが、外来文化が現地文化と融合した結果、「三種の神器」が形成されたわけである。

『古事記』と『日本書紀』の記載によると、八坂瓊曲玉・八咫鏡・草薙剣という「三種の神器」が天照大神によって統一され、後に瓊瓊杵尊に授けられたという。天照大神は太陽神であり、また蛇神でもある。実際、三種の神器を統一した人物は卑弥呼であり、卑弥呼の名前には太陽と蛇の意味が同時に含まれ、太陽信仰とも蛇信仰とも関わっている。この意味では、「三種の神器」はヤマト王権の統一を意味する象徴なのである。

終章では、論文全体を総括し、今後の研究についての展望を述べる。銅鏡、銅剣、勾玉の他に、銅鐸も稲作が盛んになるに従って大量に製造されてきた。銅鐸は紀元前 2 世紀から 2 世紀までの約 400 年間にわたって製作、使用されていた。その分布から見ると、近畿を中心とした銅鐸文化圏があるようだが、吉野ヶ里遺跡をはじめ、北部九州でも多くの銅鐸およびその鋳型も出土した。銅鐸の紋様は蛇、鹿、猪、亀などの動物紋様とともに、「脱穀」、「魚とり」な

ど稲作と関連する紋様も見られるので、銅鐸の文化的意味及びその背後にある日中両国の文化交流についても、今後引き続き研究したい。

以上述べてきたように、「三種の神器」はいずれも稲作の背景を有しており、その確立過程において、長江下流域のミャオ人や越人および朝鮮半島の人と密接にかかわっている。太陽信仰と蛇信仰の一体性には「三種の神器」の本質が認められるが、これは邪馬台という広域政治連合体、さらに「大和国」へと発展した国家建設期の文化的融合と新しい民族的アイデンティティの確立を反映した結果であろう。